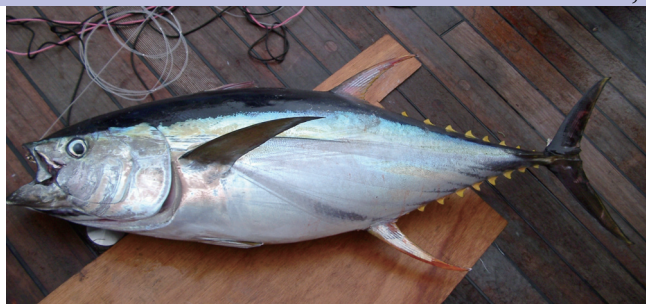


キハダ インド洋

Yellowfin Tuna, *Thunnus albacares*



管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

最近一年間の動き

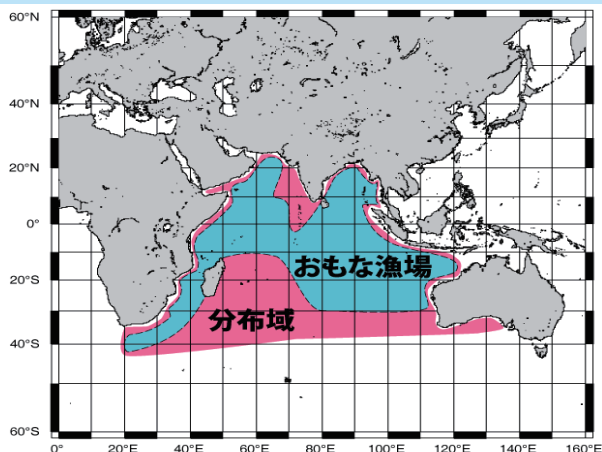
2003～2006 年にかけて、西インド洋熱帯域においてまき網漁業（主に素群れ操業）、およびはえ縄漁業、小規模漁業、および 2004-2005 年にはアラビア海の台湾はえ縄漁業において大量漁獲が記録された。そのため、キハダの総漁獲量は、2002 年以前は 30 万トン前後であったが、2003-2006 年には 40-50 万トンと急増した。ところが、2007 年のはえ縄・まき網の漁獲量は、1990 年以降最低レベルになる見込みである。この漁獲量の急減は、おそらく 4 年間に渡る大量漁獲の影響によるものと見られる。2007 年 7 月の第 10 回熱帯まぐろ作業部会では、MSY が約 30 万トンと推定されたので、今後引き続きこの大量漁獲の影響をモニターしていくことが、2007 年 11 月の科学委員会で勧告された。

生物学的特性

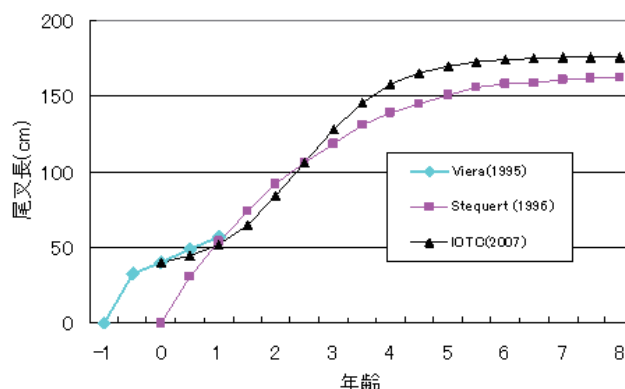
- 寿命：7～10 歳
- 成熟開始年齢：3 歳
- 産卵期・産卵場：表面水温 24℃以上の海域で行われ、赤道域では主に 12～1 月、主な産卵海域は東経 50～70 度
- 索餌場：分布域に等しい
- 食性：魚類・甲殻類・頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身や缶詰原料



インド洋におけるキハダの主要な分布域



最近の熱帯まぐろ作業部会で使用された成長式

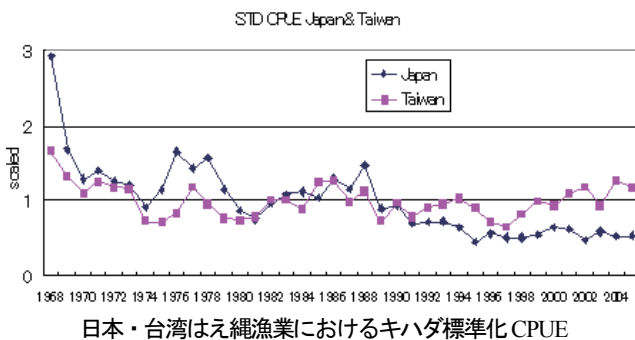
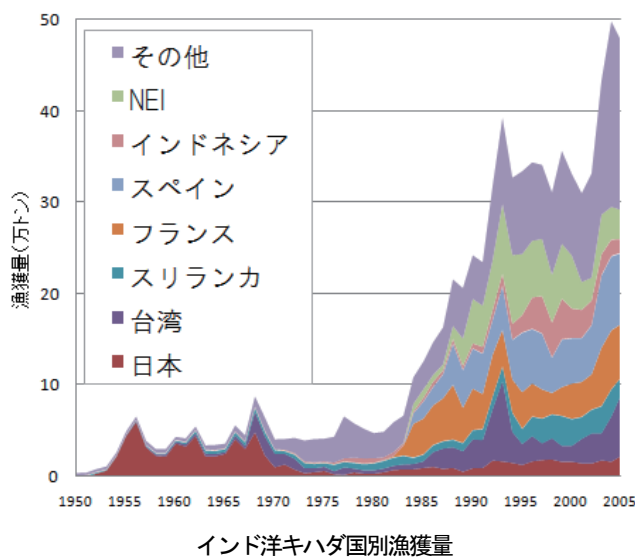
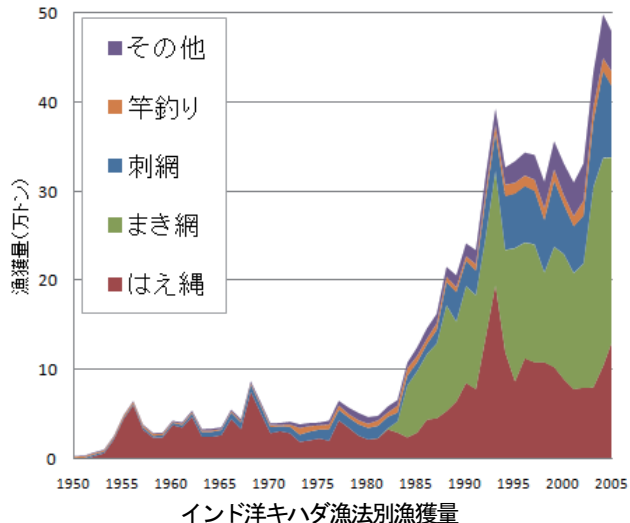
Stequert(1996)(1歳以上) + Viera(1995)(1歳未満) のペアで一つの成長式

漁業の特徴

インド洋におけるキハダの大半は南緯 10 度から北緯 10 度の熱帯海域およびモザンビーク海峡付近で漁獲されている。最近 5 年間(2001-2005)における平均総漁獲量(42 万トン)のうち、19 万トン(44%)がスペイン・フランスを中心としたまき網（ほとんどが西部インド洋で操業）、9.6 万トン(23%)が台湾、インドネシア、日本を中心としたはえ縄、その他 7 万トン(17%)が流し網（主にイラン、オマーン、スリランカ）、2.6 万トン(6%)が竿釣り（主にモルディブ）などの漁業で漁獲されており、他に便宜置籍船などの漁獲が 4.2 万トン(10%)となっている。従って、キハダの総漁獲量の 4 分の 1 程度が、沿岸国・島嶼国における小規模な地域漁業（流し網や竿釣りなど）で漁獲されることが、インド洋におけるキハダ漁業の特徴である。

漁業資源の動向

本種の総漁獲量は 1950 年から西インド洋でフランスおよびスペインのまき網漁業が本格的に開始される 1983 年までは、最大 9.2 万トンであり、1954～1971 年においては、はえ縄による漁獲が大半（7～9 割）を占めていた。まき網漁業が開始した 1984 年からは、総漁獲量は急増し 1988 年に 20 万トンを超え、1993 年には最大の 39 万トンに達し、その後は 2002 年まで 31～36 万トンの比較的高い漁獲で推移している。その後、2003～2006 年にかけて、西インド洋熱帯域においてまき網（主に素群れ操業）、はえ縄小規模漁業および 2004-2005 年にはアラビア海の台湾はえ縄漁業において大量漁獲が記録された。そのため、キハダの総漁獲量は、2003-2005 年には 40-50 万トンと急増した。その影響のためか、2007 年のはえ縄・まき網の漁獲量は、1990 年以降最低レベルになる見込みである。



資源状態

資源評価の結果には不確実性の問題があるが、最近年の漁獲量レベル(2001-2005 の平均漁獲量:41 万トン)は、MSY (約 30 万トン) レベルを大幅に超えている可能性が高いと見られる。4 年間 (2003-2006) 続いたキハダ高漁獲量 (44-50 万トン) を考慮すると、最近の漁獲量は MSY を大幅に超えた状態で過剰漁獲状況となっている。また、資源評価の結果より、キハダ資源状態が徐々に悪くなっている兆候が見られ始めている。

管理方策

キハダ資源管理方策に関し、2007 年 11 月の第 10 回科学委員会は、第 9 回熱帯まぐろ作業部会の資源評価の結果をも

とに、次の 3 点を勧告した。

(1)資源評価の結果に不確実性の問題があるが、最近年の漁獲量レベル(2001-2005 の平均漁獲量:41 万トン)は、MSY (約 30 万トン) レベルを大幅に超えている可能性が高い。4 年間 (2003-2006) 続いたキハダ高漁獲量 (44-50 万トン) を考慮すると、プレコーショナリー (予防的) 原則に基づき、漁獲量を 2002 年以前のレベルまで減少すべきであり、漁獲努力量は最近年のレベルを超えるべきでない。その他 2 点は、以前から継続して科学委員会からの勧告(見解)となっているものである。(2) FADS などを利用したまき網漁業や小型魚を対象とした一部途上国の小規模漁業による若齢キハダへの漁獲圧の増加は、今後継続した場合、資源にとって悪影響を及ぼすと見られる。その理由は、漁獲している体長が、加入量あたりの漁獲量を最大にする体長レベルをはるかに下回っているからである。

(3) FADS などを利用したまき網ではカツオを主に漁獲しているが、小型キハダは混獲となっている。したがって、小型キハダを削減する管理案は、資源状況が健全なカツオの漁獲量を減少することとなる点に留意する必要がある。

「インド洋における現行措置 (2007 年~2009 年) の実操業船隻数を 2006 年レベルに凍結」などインド洋まぐろ類委員会の漁業管理で共通する規制項目は、インド洋メバチの稿 (第 18 章) を参照。

資源評価まとめ

- 最近の漁獲量は大幅に MSY レベルを超えている。
- 資源状況は徐々に悪くなり始めていると見られる。

資源管理方策まとめ

- 漁獲量を 2002 年以前のレベルまで減少させる。
- 漁獲努力量は最近年のレベルを超えるべきでない。
- 24m 以上の漁船数を 2003 年の IOTC 登録漁船数以上に増加させない (努力量の凍結)

キハダ(インド洋)の資源の現況(要約表)

資源水準*	中位
資源動向*	減少
世界の漁獲量 (2001-2005)	31~50 万トン 平均: 41 万トン
我が国の漁獲量 (2001-2005)	1.4~2.3 万トン 平均: 1.7 万トン

(*) 1968-2005 年の情報を用いた資源評価の結果に基づく